

人とペットが幸せに暮らすための情報をお届けします。

Life Sippo Project

犬との幸せな共生を考える

保護犬を知ろう

飼い主がいらない——それはすなわち、人間社会においてその犬の居場所がないということを意味します。居場所を失った“保護犬”の現状、ペット先進国の姿勢、そして、今後の日本での取り組みなど、保護犬問題を取り上げます。



年間約4万超の殺処分 保護犬に飼い主を！

動物愛護センターなどには、迷子犬、あるいはさまざまな事情から飼育ができなくなった犬が持ち込まれ収容されています。そうした犬たちの4割は、もとの飼い主に返還されたり、新しい飼い主のもとへ譲渡されるなどし、残りの6割は殺処分となります。その殺処分数は、年に約4万3千頭（平成23年度環境省調べ）。この数字をどのように捉えるかは、個々人によりますが、それぞれ殺処分される一頭一頭の犬たちには、誕生の背景があり、性格があり、顔があり、鳴き声があることを忘れてはいけません。

収容される犬の頭数は年々減り続けているというデータがあります（図1参照）。平成17年度の16万頭からすると、6年を経て半分にまで減少。また、殺処分率も下がっています。背景にある一つの大きな動きとして、平成18年に動物愛護管理法に基づく基本的な指針が策定されたことがあります。この指針において環境省は、動物愛護センターなどに持ち込まれる犬猫の数の半減を目標に掲げており（10年計画）、それに基づき、各都道府県は動物愛護管理推進計画を策定し、独自に取り組みを続けてきました。

飼い主の意識が高まり、不妊去勢手術の実施率が



向上したことも減少に大きく貢献しています。加えて、持ち込まれる犬たちに新たな飼い主を探そうという動きが活発になってきました。各自治体の動物愛護センターなどのホームページには、譲渡の情報などが詳しく載せられていますし、環境省では、自治体で更新された収容動物に関する情報を集約した「収容動物検索サイト」を運営し、広く一般に公開しています。



殺処分ゼロを実現 ペット先進国の取り組み

古くから犬と共生関係を結んできた西欧諸国では、動物愛護の意識が高く、特にイギリスとドイツは、“ペット先進国”とされています。イギリスは先駆

を制定。現在ドイツは殺処分ゼロを実現しています。飼い主のいない犬が収容される“シェルター”は、新たな飼い主との出会いの場でもあるのです。多様なライフスタイルがある中、性格のかたまった成犬は、飼い主とのマッチングに適していることから、“飼い犬を選択する一つの方法”として社会に浸透しています。

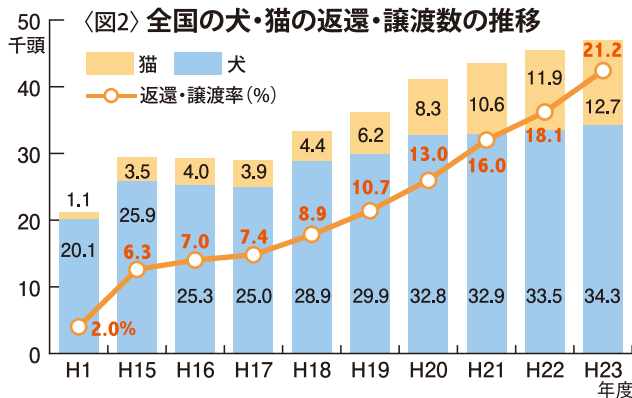
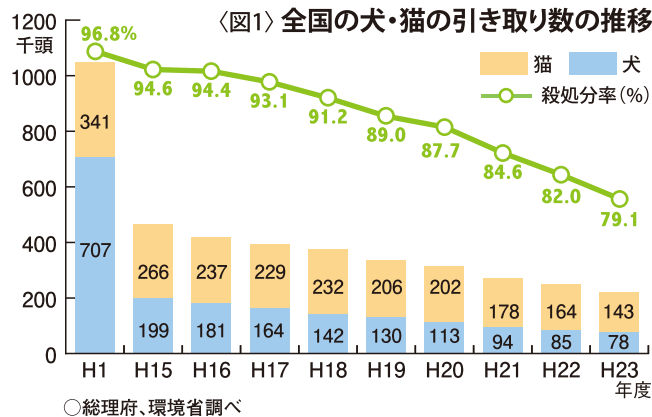


犬との共生のために 今後、なにができるか

日本でも、動物愛護、保護犬問題に取り組む機運は高まっています。昨年9月、改正動物愛護管理法が公布され、今年9月から施行されます。今回の改正法は多岐にわたっており、保護犬問題においても進歩がみられる内容になっています。自治体は、引き取った犬猫の返還や譲渡に努めること、犬の管理において非常に有効とされるマイクロチップ装着の義務化への検討、犬猫の販売業者は個体単位で帳簿をつける必要など、改善と細かな強化が盛り込まれています。もともと基本的考えとしては示されていましたが、法律となったのは大きな躍進。改正に伴い、平成25年度の予算要求は大幅に増額されており、各自治体への動物の収容・譲渡施設の整備に関する補助制度も継続されます。

ペット先進国と呼ばれる国々の歴史をひもとくと、動物愛護は、市民活動としてスタートし、今日に至っています。一人ひとりの意識こそが社会を変えるという点は、参考にすべきではないでしょうか。動物との関係は、すなわち文化水準を表すという考えもあります。人と動物とは生命として連続した存在であることは疑いの余地がありません。動物の問題と無関係な人はいないのです。

取材協力／麻布大学 獣医学部教授 太田光明氏
環境省 自然環境局 動物愛護管理室



Sippo Message

殺処分のない社会を 実現するための 「3つの柱」

1 | 収容動物の減少

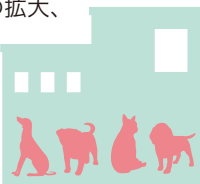
飼い主が病気療養、または亡くなるなどし、保護犬となるケースがあります。まずは飼い主が“自分が飼えなくなった時”を想定し、事前に引き取り手を探しておくことが大切です。また、飼えなくなった際、終生預かる「老犬ホーム」という取り組みも始まっています。

- 無駄吠え、咬みつきなど問題行動⇒正しいしつけの重要性の周知を徹底
- 無責任な飼育放棄⇒命に対する教育、マイクロチップの普及を推進



2 | 収容施設の拡大

各自治体の公的な収容施設では、収容数の上限などの理由から、預かり期間が決められていることがあります。今後は、シェルターなど公的な収容施設の拡大、また民間機関の施設についても充実を図る必要があります。予算の増強、税制化、基金の設立などがカギとなってくるでしょう。



3 | 譲渡動物の増加

保護された動物をすみやかに公表できるシステムを拡充し、動物を家族に迎え入れる際の一つの手段として確立させていく必要があります。保護されるべき動物を減らし、譲渡される動物を増やしていければ、殺処分の数は減らせます。

- 譲渡希望者の増加対策
- 飼育支援システム（特に高齢者）



Life Sippo Project

動物とくらす幸せ 絵画・作文コンテスト 結果発表・表彰式開催

“動物の笑顔”をテーマとした絵画・作文を小学生から募集した「Life Sippo Project 動物とくらす幸せ 絵画・作文コンテスト」には、絵画1395点、作文380点、合計1775点の応募がありました。多数のご応募ありがとうございました。

2月16日、東京築地の朝日新聞社読者ホールで表彰式を行いました。絵画部門の最優秀賞は高知市の石田将人さん、作文部門の最優秀賞は福島県猪苗代町の大坂憲裕さん（写真右）が受賞されました。



受賞・入選作品はLife Sippo Project公式サイト（<http://www.lifesippo.com/>）で公開しています。

Sippo Portrait



良太くん(ミックス)
16歳の良太はカートでお散歩に行くところ、気持ち良くなってすぐに寝ちゃいます！そんな可愛い様子を、周囲は「頑張ってるね」と声をかけてくれます。（平野 敦子さん）

ペットのベストショット募集中！

あなたのペットを紹介させていただきます！ 少しでもご応募ください！ 携帯からも応募できます。

【応募方法】

ペットの画像（ペットのみ）を下記メール宛へお送りください。〒住所、氏名、電話番号、ペットの名前、種類、性別、年齢、50字程度のPR文を記載してください。携帯電話からも応募できます。掲載する場合は連絡させていただきます。

【メールアドレス】 sippo@asahi.com

sippo

『sippo』は朝日新聞東京本社版夕刊に年4回折り込まれるペット広告特集です。朝日新聞ならではの視点でペットをめぐる社会の問題や飼育者の心得などを掲載しています。次回は6月中旬ごろの配布予定です。

